

ワシミミズクの生態およびその保護

江 明 道

四川省塩亭県科学協

訳 福井和二

ワシミミズク (*Bubo bubo kiautschensis*) は四川省塩亭県に広く分布している留鳥である。常に岩壁に棲息するところから、“岩鷹”ともいわれている。成鳥の雄は、体重1.6~2.1kg, 雌は1.7~2.5kg, 翼長410~475mm, 羽毛がぼうぼうと生え、一見大きく見え、人々の注意を引きやすい。

ワシミミズクの分布に関しては、四川盆地の中部には記録がない。ワシミミズクの生態についての報告はまだ少ないが、筆者は1981~83年の間、その生態の観察を行なったので報告する。

1. 棲息環境および行動

塩亭県は四川省の中部北寄り、東経105° 12' ~105° 43', 北緯30° 58' ~31° 31' に位置している。亜熱帯の湿潤な気候帯に属し、年平均気温17.3°C, 無霜期間約300日, 1959~1980年の年間平均降雨量825.8mm, 域内は丘陵から低山へといった地形で、海拔334~789mの間にある。県内の北西部は急坂な谷が、激しく切りたっており、南東部は緩やかな傾斜地で、紫色をした土壌¹⁾の田園景観をなしている。森林の植被は、山林を除いて大きな高木は少なく、種類も単調である。経済的に利用されている樹林の多くは、山麓や村落の周辺にあり、近年ハンノキ属 (*Alnus cremastogyne*), ヒノキ属 (*Cupressus funebris*) の混交林が増えているが、成熟した森林は少ない。50年代は本県で、ヒノキを主とした木材を自給していたが、乱伐による森林の破壊が進み、土石流により険阻な断崖が増え、時と共に風化が進み、ヒノキ、クワ、タイワンニンジンボク、サルトリイバラ、などがわずかな隙間をみつけて定着し、チガヤ、²⁾ 養草 (*Eulaliopsis binata*)²⁾ が団塊状に岩壁に生え、土地の人の手が入ることが少なく、ワシミミズクの最良の繁殖場所であり、隠れ場所でもある。

毎日、夜明けごろ、採食を終わったワシミミズクは、岩壁の周囲に隠れる樹木がないときは、先ず飛んで岩の間の枯れ枝上にとまり、岩壁に良い隙間や岩棚があると急いでそこへ飛び移る。もしも、岩壁の周囲に繁茂した樹林があり、鬱閉度が大きく、人の干渉の少ない場所がある場合は、日中は、大方その林の中で、頸をちぢめ、目を閉じてひそんでいる。ワシミミズクは物音に敏感で、人や家畜が少しでも林の中へ踏みいると、飛びだして岩の間へ避難する。少しの物音にも驚いて、頸を伸ばし、目を開けて1, 2回、辺りを見回し、耳をそばだてて警戒し、人が30m以内に近づいたりせず、何事もなければ、飛び立つようなことはない。筆者の飼育による観察では、昼間は視覚がはっきりせず、目の前の餌を探すのにも活発でない、しかし、40m先の物音の方位や動きに対して敏感に反応する。毎日午前11時から午後3時頃にかけて、前夜食べた食物の残渣(ペリット)を次々と吐き出す。通常は1日1~2回、毎回1~3個の塊りの吐出物を出し、そのなかには1~3個の鼠の頭骨があった。絶食2日後4匹のヒメネズミを与えたところ、その日の吐き出しは、ただ一塊りであった。ワシミミズクの食物利用率は飢餓の度合いと関係があるものと思われる。

夕暮れ、人が静かになるころ、岩の間や、林の中から飛び出して、150~500m離れた山の石の上や、あるいは露出した枯れ枝の上にとまって、僅かの間、辺りを見回し、雄鳥なら、ge,ge-と鳴く、すぐに雌がji-ji-と答えながら、同じ樹に飛んでくるか、あるいは2~10m以内にとまっ

て鳴き交わす。その後、それぞれに羽繕いをしたあと、餌を求めて同一方向の、それぞれの場所へ飛び去る。5回の観察によって、ge-ge, ji-ji-と1~2回の鳴き交わしを、一晩のうちに3回聞くことが出来た。見たところ夜間に一度は寄り合うようだ。

山林(泡桐林場)³に棲息する一対のワシミミズクを対象に、3年にわたって習性を観察した。幼鳥、卵、鳴き声などをたえず調査し、終生配偶が変わらなかはさらなる実証が待たれる。

2. 食性

ワシミミズクのペリットは、当地に生息する他のフクロウ類のペリットと比較して粗くて大きく、外縁部に滑らかさがなく、野外でも容易に区別できる。1982~83年、ハンノキ、ヒノキの混交林の中で、季節に応じてワシミミズクのペリットを収集した。その内容を表1に示す。

ここに見るようにワシミミズクの主な餌はネズミである。食餌の季節的な違いは、春から夏にかけての食餌量が、秋に比較してやや多いようである。これは活動量に相関するものと考えられる。

度々、採取した5,750gのペリット中からアト・ランダムに500gを取り、炭酸ソーダ液滲漬後、過酸化水素水で洗い、選び出したネズミの頭骨が56個あり、その種類を同定したところ表2のとおりである。

これに見られるワシミミズクの主な食物が、田畑に危害を及ぼすネズミが多いことがわかる。'83年3月、明け方に銃猟された雄のワシミミズクの、剖検による胃内容物は、未消化のヒメネズミ2、ヒマラヤネズミ1、消化された皮と骨だけのヒメネズミ2、ニイタカネズミ1であった。このことにより、ワシミミズクはネズミ防除の大きな役割を果たしているとみられる。

3. 繁殖習性

'81~83年の3年間、2対のワシミミズクの繁殖期3カ月の観察によって、彼らが毎年1回、繁殖していることがわかった。

繁殖前期；毎年12月中旬、彼らは、いつも同じ岩壁の隙間に生活の場を構え、夜明けあるいは日暮れ時、あるときは岩棚で、あるときは岩壁の頂上で、またあるときは枯れ枝の頂点で、戯れるように飛び交い、鳴き交わしを繰り返す。このような3~5日の後、ある時、先に飛び出した1羽が、その場所の上を一回りして、もとに戻ると引き続き、軽く羽をくわえたり、戻したり、親しげに数回繰り返す。このとき雄は低い声でge, geと鳴き、雌はやはり小さくji-, ji-と応える。5分も反復鳴き交わした後、交尾が行なわれる。最初の交尾から6~9日を経た後、巣作りが始まる。

巣作り；ワシミミズクの巣は、ほとんどが、絶壁に張り出した岩棚で、峻険な見はらしのよい場所に作られる。巣のまわり1m内に、草叢があり、比較的乾燥した所である。岩棚を爪で搔くようにして掘った碗状の巣で、観察した5巣の平均直径は28.6cm(27.0, 27.3, 28.5, 28.7, 31.5)であった。深さの平均は9.0cm(6.02, 8.6, 7.9, 10.8, 12.5)。巣の大きさは、巣をかけた岩場の硬さによってきまる。孵化前の巣には敷かれている巣材はなく、孵化後、僅かばかりの親鳥の羽毛が敷かれている。

表1 ワシミミズクペリット中の骨分析

収集時間	ペリット重量g	ネズミ頭骨	ウサギ上顎骨	キジ嘴
82.2	500	78	2	1
83.3				
82.5-6	500	74	1	
82.8	500	72		1
83.9				
82.10	503	59	2	
83.11				

表2 ワシミミズクペリット中のネズミ類

ペリット重量	頭骨数	セスジネズミ	ヒマラヤネズミ	ドブネズミ	ハツカネズミ
500	56	45	9	1	1
%	100	80.3	16.7	1.8	1.8

産卵：ワシミミズクの産卵は12月下旬から翌年の3月中旬に行なわれる。3ヶ所の繁殖場所における'77, 79~83年の間の観察では、1月以前に産卵したものの卵数は3~5個、通常は3個、1月以後に生まれた卵数は2~3個で、3卵を越えることはなかった。初回の産卵に人為的な干渉があり、再び産卵したものは卵数が少ない。卵は白色楕円形、卵重は平均約55.4g(55.1, 55.7, 55.4)、卵径平均46.9×57.4mm(47.2×57.5, 47.0×58.0, 48.6×56.8)。

孵化：ワシミミズクの抱卵は雌のみが行なう、ただし、夜になると一度、飛び去って5~8分後に再び巣へ戻る、この間に水を飲んだり、卵を冷やすことになる。かつて、1982年4月、巣の下の傾斜地で拾得したペリット485g中にノウサギの門歯4個のほか、ミヤマテッケイの羽毛がみられた。

巣と雛の防護：ワシミミズクは繁殖期の巣の防衛に果敢に働く習性がある。1977年泡桐林場の一主婦が、ワシミミズクの巣から2mほど離れた崖の下で、柴を拾っていたところ、抱卵中の雌ワシミミズクが主婦の頭の白い頭巾を、爪で蹴って、崖の上へ飛び去った。'83年4月、両河郷の王幣国ほか3人が崖を登ってワシミミズクの雛を捕獲しようとしたところ、雌雄両親共に命懸けで飛び掛かってきた、小石を以て追い払おうとしたが、なかなか離れようとしないうちに、二日目になって爆竹で脅して、親鳥が去ったあと雛を捕獲した。ワシミミズクの巣の周囲2~3mのところ、もしも、柴草が刈られたり、足で土砂を踏み崩したり、環境に変化があれば、フクロウは巣と卵を放棄することは珍しくない。

4. ワシミミズクの保護

ワシミミズクは本地区の猛禽類中体形の大きい唯一の留鳥である。食性やその量もわかっている。ワシミミズクは農業被害をもたらすネズミの捕食をもって農業に多大の貢献をしている。現在、国はこれらもう猛禽類を保護動物としており、これにより、ワシミミズクに対する保護も当然重視されている。

この2年ほど来、塩亭県委員会、県政府は各種会議を利用して愛鳥週間の情宣活動を行ない、県科学協議会、林業局も各種の形の宣伝を行なったが、しかし、依然として幅広い大衆の関心を呼ぶには及んでいない。この1年ほどに密猟より、雛が市販され、取り締まりを受けたことがあった。われわれは、この益鳥を保護し、その特有な生息環境を保護すべく、県林業部の責任ある専門家に提案し、毎年の愛鳥週間における活動、保護鳥類の取引の禁止、林業警察の取り締まりの強化、狩猟許可と銃の所持許可の厳重な検査など、組織的な管理措置の実行を建議した。

*1 紫色をした土壌。この地方特有の土質。

*2 日本名は不明、イネ科、多年性草本、草丈1m、直立して密生し、中国には広く分布する。

*3 泡桐林場。泡桐は中国産のキリ (*Paulownia fortunei*) 日本のキリは淡紫色の花をつけるが、この種の花は白色である。中国では長江以南、台湾、ベトナムに分布する。他に黄河以南では栽培種として見ることが出来る。

林場は、革命後中国では農林業が集団化され、農場、林場といった。ここでは、キリを植林した林を言う。